

石神遺跡の瓦

明日香村飛鳥集落の北西、旧飛鳥小学校東方から不思議な石造物が掘り出されたのは、1902年のことだった。花崗岩製のこの石造物は「石人像」「須彌山石」とよばれ、現在飛鳥資料館で展覧されている。

飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、1986年以来、この石神遺跡の発掘調査を継続している。発掘は16回を数え、2つの世紀にわたる調査部でも数少ない調査となった。調査ごとに概要を報告しているが、複雑に重複する遺構は調査担当者を苦しめ、調査ごとにまとめられた遺構変遷は、それ自体が遺構「解釈」変遷になるぐらいだ。本稿は、そのような石神遺跡の遺構変遷に新機軸を打ち出そうなどという大それた意図に基づくものではない。

ことの発端は、現在進行中の飛鳥池遺跡の報告書にある。飛鳥池遺跡（明日香村飛鳥）は飛鳥時代最大の工房遺跡なので遺跡地内に瓦葺建物が存在した徴証にはとほしいが、飛鳥寺に近接していることもあって、多数の軒瓦が出土している。

これらの中に、八弁の蓮華紋が八角形となる「角端点珠型式」あるいは「奥山廃寺式」と呼称される軒丸瓦がある。出土した8点、最大でも蓮弁1枚分の破片にすぎない、この軒丸瓦が飛鳥池遺跡の性格を左右するほどの重みをもつものではない。ただ、飛鳥寺ではごく少量の出土にとどまるこの型式の出自は知りたい、と思った。

調査過程での概要報告では、これらの軒丸瓦について、奥山廃寺（奥山久米寺跡、明日香村奥山）の同范品（奥山廃寺式 型式E）と報告してきた。奥山廃寺 型式は、この寺の金堂創建軒丸瓦だ。

しかし、出土した軒丸瓦を詳しく検討すると、奥山廃寺の「奥山廃寺式」軒丸瓦（現在、A～Eの5種に細分）とは同范でないとわかった。飛鳥でこの型式の瓦を出土する寺跡はあまりなく、和田廃寺（橿原市和田町）などでごく少量が出土した以外、ほとんどみつからない。唯一の例外が、石神遺跡。ここから出土する飛鳥時代の軒丸瓦の大半が「奥山廃寺式」だ、ということはあまり知られていない。報告していないから当たり前である。その責をぬぐいたい。

石神遺跡から出土した奥山廃寺式軒丸瓦は、総数64点

にのぼる。まとまって出土したのは、遺跡の南辺、第3・4次調査区。第3次調査区では、南接する水落遺跡との境界施設SA600・560の南側、溝SD531やSD524・557から出土した。

第4次調査区では、B期（7世紀後半：天武朝）の総柱建物SB735の基壇をおおう黄色粘土層から出土した。その後も、少しずつではあるがこの型式の軒丸瓦は出土している。

石神遺跡の「奥山廃寺式」軒丸瓦は、A～Eの5種類がある。まず各々の特徴をのべよう。

石神A 弁区と外縁との間が0.7～0.8cmほどあき、蓮弁・中房ともやや盛り上がり方に乏しい。弁幅4.4cm。間弁は、中房から発した放射状の軸線と、左右にひらいた紡錘形部分とが離れる。弁区から外縁との間にかけて木目状の範傷がある。

瓦当をほぼ完存する資料（図21-1）は、筒部先端を片ほぞ形に加工した丸瓦を裏面上端に接合する。ほかの資料は、筒部先端未加工の丸瓦を接合する。瓦当の各蓮弁に対する丸瓦接合位置は、互いに直交する2方向に限られる。

胎土・焼成は、明灰色で表面が多少いぶし焼き風に黒くなる、淡青灰色で硬質、表面が暗褐色で断面が明褐色、の三者があり、とが多い。合計17点出土。

石神B 石神Aに似るが、中房がやや大きく（直径3.5cm）、間弁先端の紡錘形の部分が太い。範傷は一致しない（2）。

平坦に仕上げた瓦当裏面上端に、先端未加工の丸瓦を立てて接合する。支持ナデはなく、接合粘土は少量。砂粒の少ない緻密な胎土をもち、軟質の焼きのものが多い。表面は明灰色、断面はオレンジ色。8点出土。

石神C 石神Aに似るが、中房がわずかに小さく（直径3.1cm）、蓮弁の形状や範傷の位置も石神Aと一致しないので、別范と認定した（3）。弁幅4.5cm。

丸瓦は、先端の凹面側をヘラケズリして接合する。内面接合粘土は少ない。砂粒の少ない緻密な胎土をもち、瓦当はごく薄く作る。石神Aとは範傷が一致しないのでこの型式と認めた2点を含めて、合計3点ある。

石神D 弁区と外縁との間のあきが0.5cmしかなく、石神遺跡の奥山廃寺式軒丸瓦では最も狭い。弁幅4.2cm。砂粒を多量に含んだ粗い胎土が特徴的。

丸瓦凹面先端をヘラケズリして瓦当裏面上端にさし込

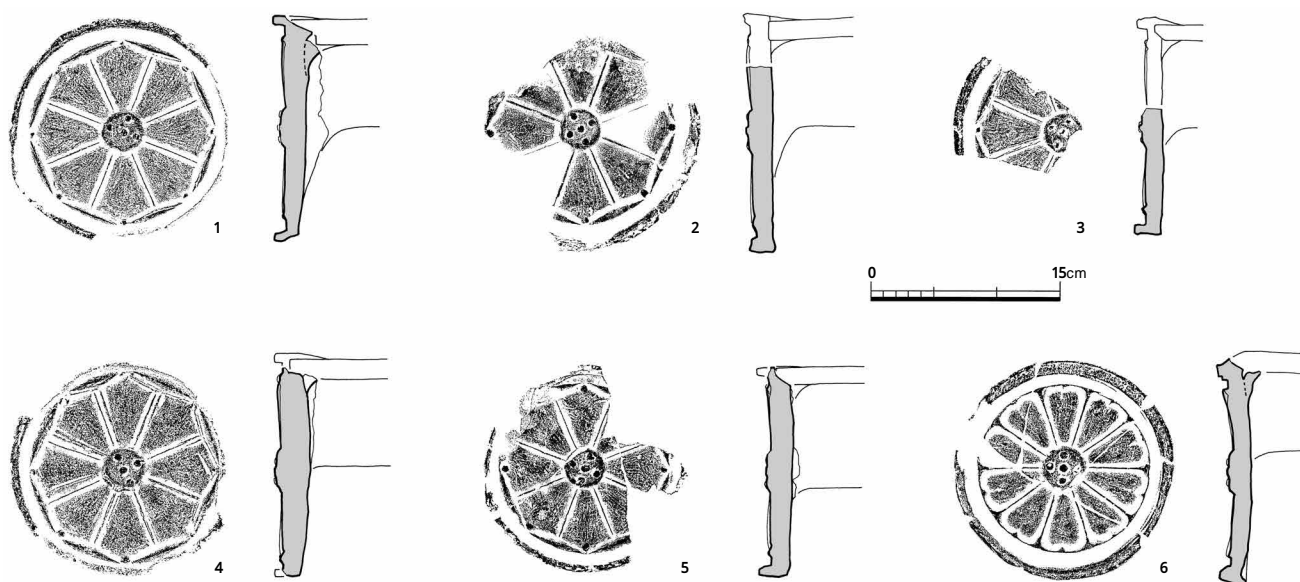


図21 石神遺跡の軒丸瓦 1:6

むもの(4)、丸瓦凸面先端をヘラケズリして瓦当裏面上端に少しだけさし込むもののほか、加工をほどこさずに瓦当裏面上端にのせて接合するもの三者がある。合計13点が出土した。すべて第3次調査区出土。

石神E 石神A～Cのように弁区と外縁との間が0.7cmほどあく。石神Aに似るが、間弁が細く、先端の紡錘形との間がやや広く離れることと、弁端の点珠が小さいことで区別できる。弁幅4.1cm。砂粒をほとんど含まない須恵質の焼きも特徴。

丸瓦凹面先端を斜めにヘラケズリして接合するもの(5)と、先端を片ほぞ形に加工し、瓦当裏面上端に被せるようにして接合するものがある。奥山廃寺 型式Eと同范。焼きも胎土も奥山廃寺と一致する。7点出土。

以上の「奥山廃寺式」軒丸瓦のほかに、中房だけはよく似た十弁の素弁蓮華紋軒丸瓦がある(6)。蓮弁の形状からみて、飛鳥寺「花組」の系統だが、飛鳥寺ではこれまで出土していない。仮に「石神F」と名づけよう。

石神Fは、飛鳥寺 型式よりも蓮弁にふくらみが強く、外縁の幅が広い。平坦に仕上げた瓦当裏面上端に、凹面をヘラケズリした丸瓦を接合する。裏面の下半分の周囲をつまみあげてとがらせる。14点が出土した。

さて、石神遺跡から出土するこれら飛鳥時代軒丸瓦はどう評価すればよいか。石神遺跡A～D期の建物はすべて掘立柱建物で瓦葺ではないから、そこにはのらない。

奥山廃寺式軒丸瓦の年代観は、これを620年代から630年代とみている。片ほぞ接合があることや、ともなう玉縁丸瓦が玉縁部内面(凹面)をヘラケズリする、といった、飛鳥時代初期の「星組」瓦に特徴的な技法的要素をそなえていることが、その理由。そして、640年前後には、百済大寺(吉備池廃寺、桜井市吉備)や山田寺(桜井市山田)で

山田寺式軒丸瓦が登場し、素弁型式が終焉をむかえるからだ。紋様様式からいえば、奥山廃寺式と山田寺式との間に「船橋廃寺式」がある。奥山廃寺式は、推古朝の末期から舒明朝前半ぐらいと考えたい瓦だ。素弁十弁軒丸瓦(石神F)についても、同じような年代とみてよい。

さて、石神遺跡A期の遺跡中枢には、東西に2つの区画があり、その東区画の中心に井戸SE800がある。この井戸の構築は、出土土器により飛鳥土器編年の飛鳥の新しい段階とされる。土器の年代は山田寺下層土器などによって、640年代とみてよい。これが石神遺跡A期の開始年代ならば、軒丸瓦6種はそれ以前の瓦となる。

石神遺跡の軒丸瓦A～Fの出土点数78点(種別不明含む)は、奥山廃寺の奥山廃寺式軒丸瓦出土点数(115点)に迫り、平瓦広端幅35cmとした単純計算で軒先27.3m分。これは、飛鳥寺東金堂の屋根正面(平側)全長よりも若干長い距離になる。石神遺跡に、井戸SE800構築以前の瓦葺建物が存在した、と推定することは十分可能だ。

飛鳥時代初期には、瓦葺建物＝仏教寺院、が常識。斉明女帝が小墾田宮を瓦葺にしようとして頓挫したのは655年のことだった。飛鳥寺の北面大垣に接して別個の寺があった、とも想像しにくい。

けれども、埼玉稻荷山古墳鉄剣銘に記されたような原義での「寺」として、石神遺跡の瓦葺建物を評価することはできないだろうか。私はその可能性を想定するのだが、紙幅も尽きた。稿を改めて論じてみたい。

(花谷 浩)

参考文献

西口壽生「石神遺跡SE800出土土器の再検討」『年報1997』